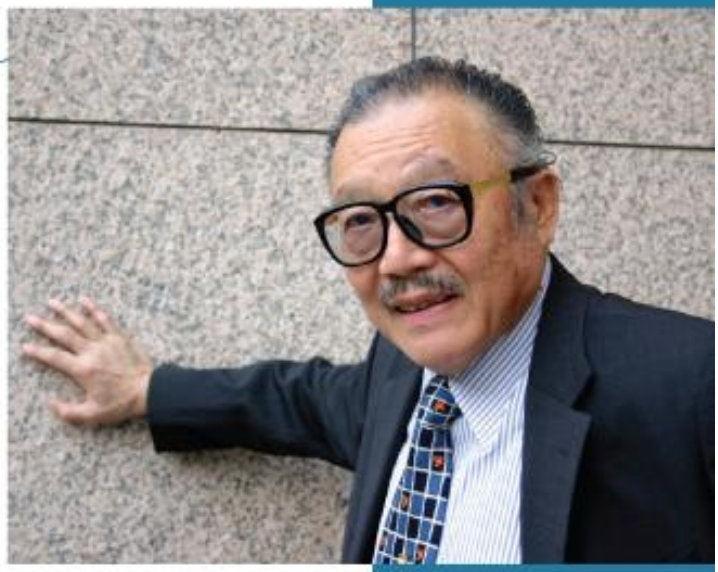
Interview



ルネこだいら入口にて

新モノオペラ「人情歌物語 松とお秋」を国民オペラにしたい

オペラ歌手 岡村喬生

日本を代表するオペラ歌手、岡村喬生さん（76）がモノオペラ「人情歌物語松とお秋」をルネこだいらで6月28日に上演する。これは小平市のイタリア語サークル「イル・フィオーレ」の15周年記念イベントとして開催されるもので、代表の神田道子さんが以前から岡村さんと親交があるため実現した。

「人情歌物語 松とお秋」の出演者は岡村さんただ一人、前編「嘘ァつかねえー松」、後編「ほたる放生ーお秋」合わせて2時間を、一人で9役を歌い、語り、演じる。その上演出も、台本も岡村さんの手になるものだ。江戸時代、社会の底辺に生きる男女の悲哀を描いた山本周五郎の短編を脚色し、大中恩（おおなか・めぐみ）さんが和魂洋才で曲をつけた。岡村さん念願の、すべてがメイドインジャパンで、誰も手をつけていない新しいモノオペラを3年近くかけてつくり上げ、これまで10回上演している。多摩地域では今回初のお目見えである。

早稲田大学第一政経学部新聞学科の出身。入学後グリークラブに誘われたのがこの道へ入るきっかけとなった。あの迫力あるバスの美声をグリークラブに入るまで自分で気づかなかったと聞いて驚いた。歌うことに目覚めた岡村さんの大学時代は合唱一筋。卒業後は東京放送合唱団に所属し、28歳の時イタリアへ留学。国際コンクールで優勝し、オーストリアのリンツ、ドイツのキール・ケルンの3つの歌劇場の専属第一バス歌手を勤め、60年代から70年代にかけて20年間にわたり世界の檜舞台で活躍した。

ヨーロッパでは、オペラは国や地方の文化度を測る最大のバロメーター、どこででもオペラが上演されている。その公演には莫大な費用がかかるためか。日本ではオペラのチケット、特に外来公演は高いというのが通例で、一部の人々や首都圏に住む人々の娯楽に偏っている。岡村さんは上質廉価なオペラを全国へ普及したい、との思いから2001年「NPOみんなのオペラ」を創設。芸術総監督としてオペラの国内大衆化と国外への日本文化認知へ情熱を注いでいる。

「松とお秋」もそのひとつで、これまで、いつともどこともわからない国が舞台の「魔笛」（モーツアルト）と、日本誤認を改訂した「蝶々さん／マダマ バタフライ」（プッチーニ）など、国内での上演に相応しい作品をレパートリーにしてきた。

中でも初演以来104年にわたり、日本を世界に紹介してきた「蝶々夫人」の舞台が海外では今でも、誤った認識のまま描かれている。例えば長崎港の彼方から富士山が見え、蝶々さんが土足で家にあがり、神仏混交はなはだしく…日本人として正視するに忍びないことに以前から業を煮やしていた岡村さんは自ら、原作のイタリア語の日本誤認箇所を改訂した。これをイタリアで来年公演予定だったが、資金調達の目途がつかずやむなく延期。海外での改訂版上演は「ヨーロッパの歌劇場で間違った演出でマダマ バタフライを歌わされていた頃からの悲願」であり、日本のオペラ関係者としての責務と思っている。

「安屋台で、松はこうやって盃に自分の口を持っていって呑むけれど、一方の信吉はね、盃を口に持ってくるんですよ」と身振り手振りで、「松とお秋」を落語のように楽しげに語る。一人で9役をこなすには、心理面も含めてその違いを際立たせるのが最も難しい。年齢を全く感じさせない堂々たる体躯と熱い話しぶり。岡村さんが演じる浪曲風モノオペラの周五郎の世界はどのようなものか…興味はつきない。

- 6月28日（土）
  13時15分開演
- ルネこだいら中ホール
- 料金　3,000円
- ルネこだいら
  チケットカウンター

☎042（346）9000
（問）042（465）1995
イル・フィオーレ（神田）